

漢字の「九」と「鳩」。幼い子どもたちにとって、どちらの文字が覚えやすいだろうか。多くの人は「九」と答えるだろう。だが、意外にも答えは「鳩」である。簡単な漢字が実は覚えにくく、覚えにくそうな漢字が実は覚えやすかったりする。

国語の授業を担当していたときのことである。4月である。生徒たちに「漢字を覚えるために二番目にいい方法を行っていきます」と話す。こう言われると一番いい方法のことが気になる。「一番いい方法は、小学1年生で小学校で学習する漢字を全部覚えてしまうことです」と話す。続けて「皆さんは中学生ですから、一番いい方法は、すでにできません。だから二番目にいい方法をやるわけです」と説明する。

もちろん、小学1年生に小学校で学習する漢字を全部教えた経験はない。だが、たぶん正しい方法である。長年の実験の結果、このことを証明した方もいる。私たちの常識を覆したわけである。

その方によると、たとえどんなに難しい字であろうと、仮名と漢字を一緒に教えると、どんな子どもでも漢字のほうを先に覚えるそうである。1年かかっても仮名が覚えられない子どもでも漢字だったら覚えられそうである。私たち大人が易しいと思っている漢字は難しい。難しいと思っている漢字のほうが子どもたちにとっては易しかったりする。

鳥と鳥という字がある。区別が難しそうである。しかし、子どもはちゃんと区別できる。大人は、鳥でも鳩や鶴などという字は難しいと思っているが、子どもにとっては鳥という字より鳩や鶴のほうが簡単である。それは、鳩という具体的なもののほうがイメージが鮮やかだからだろうか。

同様に、虫でも、ただ虫というだけでは、その子によって思い浮かべる虫が違う。ところが、蝶とか蟻とかなると、まさにそれは蝶であり、蟻であるわけだから簡単に覚える。したがって、虫という字より先に、蝶とか蟻とか蟬という字を教えればいいわけである。

小学6年生まで、この調子で覚えていけばよさそうなものだが、そうはいかない。記憶力は小学1年生のときが最高で、あとは衰えていくばかりなのだそうだ。そこで、小学1年生で全部覚えてしまうわけである。あるいは、幼児教育に目を向けるようになる。

教育には、常識と思っていたことが、実はそうでもないということが多い。英語教育などもそうであろう。日本では、国が教育の基準を作成し、それに沿って教科書も作られている。指導する順序が決められている。漢字であれば、学年ごとに学習する漢字が決まっている。

小学校でよく見る光景である。先生が黒板に漢字を書く。子どもたちから「まだ習っていません」の声が上がる。ばかばかしいと思う。学習していないからといってその漢字を使わないのではなく、ふりがなをふればいい。何でもそういくわけではないが、一つ上の学年の漢字ぐらいいいのではないか。また、ひらながで書いてしまうとイメージがわきにくい言葉もある。その場合は、学習していなくても漢字で書いたほうがよい。

学校の先生であるから、国の基準に従って授業を行うのが基本である。だが、常識を疑う目は持っていたほうがよい。そのほうが、きっと魅力的な授業ができる。